企業訪問レポート

“三方よし”の実践、次の世代へ

生田産機工業株式会社　京都府京都市伏見区

生田産機工業株式会社は、100年以上の歴史を有する銅および銅合金をはじめとする金属素材生産設備の設計・製作・販売メーカー。

1955年に面削技術の特許を取得して以来、高度な技術と不屈の精神で信頼と実績を築き上げ、半世紀以上にわたり、伸銅設備業界のトップを走り続け、国内だけでなくアジアやヨーロッパなどの海外向けにも「IKUTA」ブランドを確立している。

創業以来「モノづくりを通じた人づくりで人と社会に潤いを生み出す」という信念のもと、現在も顧客・協力先・社会（社員・家族）の全てが満足できる事業活動を目指す“三方よし”の経営理念を大切にしている。

会　社　概　要

会社名：生田産機工業株式会社
所在地：京都府京都市伏見区横大路下三栖辻堂町６番地
電　話：075-611-4347
ＦＡＸ：075-622-4391
創　業：1919（大正８）年
設　立：1953（昭和28）年４月
代表者：代表取締役　生田 泰宏
資本金：2,000万円
従業員：90名
事業内容：金属生産設備設計／製作／販売業
URL：https://ikuta-sanki.com

本社社屋

世界トップレベルの品質を支える

近年、スマートフォンやパソコンといった電子機器の高度化が進み、電子部品の素材である銅条板には、厳しい寸法精度や表面品質が求められているが、その製造過程に必要不可欠な設備機械の一つである面削機は、同社が国内シェア９割を誇る。

面削機は銅条板製造工程の上工程で使用される。銅鉱石は熱間圧延を経て条板状になっていくが、その過程でどうしても表面に発生してしまう酸化異物を、面削機で削り取るのである。

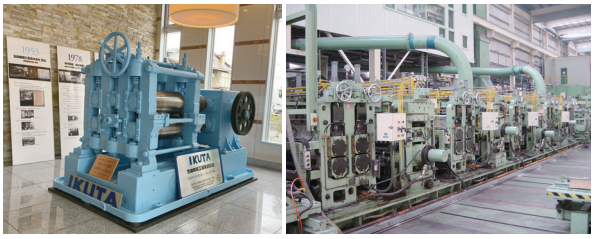
素材である銅条板の厚みはどんどん薄くなるとともに、表面品質は超微細な状態を求められるため、品質を左右する面削機はより一層、重要な役割を担うこととなる。

同社が金属素材生産、特に伸銅分野において高い評価を獲得できている理由は、主力の面削機のほか、面削機に取り付けるカッター、そのカッターを研磨する研削盤の３つの核となる製品を生産できる体制を確立したことが大きい。

事実、この３つの製品全てを自社で提供できるのは、世界でも同社１社だけである。

日本の電子部品の精密さは世界トップレベルを誇っているが、その品質を陰で支えているのは、日々、弛まない努力で進化を遂げてきた、同社の面削機をはじめとする生産設備機器であり、日本のモノづくりに欠かせない製品となっている。

同社の生産現場では「後工程はお客様」というスローガンがあり、次の工程にはお客様（または次の工程担当者）がいることを常に想定し、うまく引き継ぐにはどうすれば良いかを考えながら業務に取り組み、日々進歩を続けている。



面削機初号機タイプと面削ライン

先代からバトンを引継ぐ

創業は、1919 年に現社長の祖父が京都伏見で開設した生田鉄工所から始まる。1950 年に伸銅設備機械の製造に着手し、1955 年に開発した黄銅板面削装置は、当時の国内伸銅メーカーがこぞって導入し、伸銅製品の品質向上に大きく貢献した。

先代（現社長の父）が 2 代目社長として 1974 年に就任後、両面面削装置を韓国メーカーに第 1 号として輸出し、以降、香港、台湾などにも輸出を展開し業績を拡大していった。

1999 年、現社長の生田泰宏氏が 3 代目社長に就任後は、これまで外注していたカッターの内製化技術を開発。一連の生産ラインをフルカバーできる体制を構築し付加価値を高めることに取り組み、それを元に 2002 年には中国へ進出、その後トルコにも子会社を設立するなど飛躍的に業容を拡大させた。

社長就任間もないなか、いきなり中国へ進出することはリスクが高すぎるとして全役員が反対したが、社長は全役員を説得し進出を決めた。

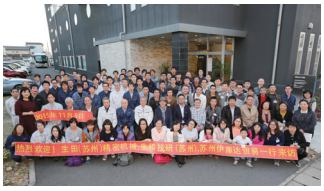
「創業者、2 代目、3 代目それぞれ、使命や役割が異なる。受け継いだ財産をどう活かし伸ばすかを考えた。今の事業だけ行い守りに入れば企業は徐々に衰退していく。実際、守りに入った競合先は次々と無くなっていった」と後に振り返る。

約 25 年前、無名であった同社が、共産主義が色濃く残る中国へ進出するにあたっては、大変な苦労や困難があったことは容易に想像がつく。

今では、中国で高い信頼を勝ち取り、面削機の受注額は中国が日本を上回るなど、同社の業績進展に大きく貢献している。

また、少子高齢化による人手不足のため人材確保に苦慮する企業が多いなか、同社は新卒、中途採用者や外国人を含め多様性を重視して採用している。

「今いる社員にも言えるが、私の思い描くビジョンに少なからず共感し、この会社であれば働く意義を見い出せると思ってくれているのではないか。経営者として世界中の商機をしっかりとつかみ、三方を豊かにするのが、私の役割である」と自信をみせる。


中国の子会社社員家族本社訪問

子供モノづくり体験会

“三方よし”の実践

創業以来、「買い手よし、売り手よし、世間よし」と言われる“三方よし”の経営理念を大切に守ってきた。なお、同社では“世間”に“社員やその家族”を含めて“世間よし”としている。

「先代社長である父が急逝したことにより、38 歳という年齢で何の心構えや経験も無く、社員からの信用も全く無いという状況で社長に就任することになった時には、人生最大の逆境、どん底の苦しみを味わった。社員も“三代目が会社を潰す”という言葉が脳裏に浮かんだと思う。そんな暗闇の中にいた私に光明となり、指針となったのが、祖父や父の経営理念であった“三方よし”であった」と社長は語る。

次の世代へ

「お客様のところへ訪問した際、お客様の口から社員のことを褒めてもらえることが何よりもうれしい」と語る社長からは、社員への想いと温厚な人柄が伝わってくる。

「先達から受け継いだ御恩を“恩送り”することこそが私の使命だ」と語る社長は、新たな市場開拓を見据え、目を輝せていた。　（岡村俊幸）